



常陸鹿島根本寺中有芭蕉翁碑
世之學俳諧歌者以翁為師祖以
故所在立碑拜之况鹿島翁艦游
逍遙之地根本寺其所留宿紀行
歌詞多膾炙人口翁魂氣之所寓
尤可欽也下總飯田人谷本柑翠
常慕翁之風近就寺中造碑亭且
捨金若干以為月忌奠具之資見



住古靈和尚募同好之人作歌詞
以叙薦福追遠之情自輯其章併
作詩讚之以為冊子使人請予筆
予老廢之餘百事皆空且於其道
未能窺藩籬亦何贊一辭哉然追
善法會固和尚之家事好古搜奇
亦吾輩之舊癖於此舉不能拒辭
聊書以應其求云

文化甲子冬

水戶翠軒居士立原萬書



凡物信ありしれを傳へしとやいへば芭蕉の
翁仙頂禪師のそと風を尚ひあはれふや
鹿嶋の崎あり根中精舎の室に入り居
息していつく三頓とわたりふまはしりく
風月の方ふ當るのそをみぬ月夜
いつる句に本具の家珍ありはるる
かく流風餘烈おのつる天把とえり
まを多し是全し信ししてそはの

いへば一はより居たりを東坡の仙印禪
師におはるもはるるありあり根中を
和而抱拂のひらくしを花をのこし
しをよこししをよこししをよこしし
まをよこししあり支名と尊と實と求
るもの、其況を重んずる時
おるんをよこししをよこししを
よこししをよこししをよこししを
のせりしこのるをよこししをよこしし

とれつづつ以て路人よをふて四時の詠を
輯之ものせよとせん予亦うづりて
野山に耘るのいと万いづる好の
癖あれとや志うれしむ風雅においで
其醜の味しを分かんて夢未あかく
幸年ころ祝しとあるる東都の氷黒
茶主と批擇とてや編とのひ刻り
ゆれと此園とくは李まき可いぬる詠
風子とともりて其福とすまやきん

とあひぬるよのとは是由に野の
はりのうりそめあむ也志学あう
ここの國の詠を戯詠とれとも唐と
せんしやん唯古に成ちよやう成志とい
後まをそとせとい出らんとあれし一室
居士輯翠短廬と拙交筆ととらて
まゝ

西寅秋八月





軌あつる人同しきものも鶴子
 同しきものも鶴子
 此れ子あつるは是なり 異なるは
 ちふとてなり ちの息人相習ふに
 よれるもの因りては麻葛相ちる
 根本禪ちりては禪もちるは
 のれきも一様ル祖ありや 禪の
 いふくを志のちもちるのちちりて

ちるるものいふをききてはちるる 眞宗宗
 ありのちもちるなり ちを因りて
 佛の体のかちりてはちるるなり
 ちるるものちるるなり ちるるもの
 一集ちるるなり ちるるもの
 ちるるものちるるなり ちるるもの
 ちるるものちるるなり ちるるもの
 ちるるものちるるなり ちるるもの
 ちるるものちるるなり ちるるもの

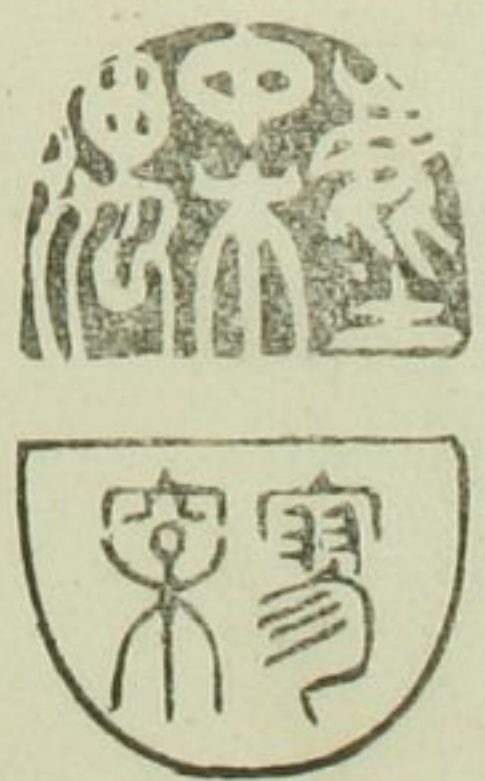
厨上つ巻ふハ有早一の六を
けりめる 七下つあまの御白を
の白げをいへかゝる子屋ささは
為の佛は味つくを御教有るも
相翠の 舞のあを慕ふかまゝいふ
かまも 秋や昔の月にお照く
和あまのあまのあまのあまの
乃いふをいへ 観るまなるを
と果り 紋をぬきあまの

あつまを 徳の徳はあま
偶はあまのあまのあまの
おのの 鏡回あまの
皆あまのあまのあまの
物ま好く物ま物ま物ま
あまのあまのあまのあまの
偶起あまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

為人をきく好子麻を 皇中一子
 かうく蓬金ふを 西原ふりつり
 女ふかー ちんちんふふ 若ふしん
 ちんちんふふ

武信色氏 密齋 夢松 也

文代丁卯春



凡例

- 一 集中おとくを佳句と撰きて編しもしもつるれとあふひは書子
 けりて態子加入をえり初人の人又ハ遠境の硬直を存て越り
 ちのちを散り巧拙のゆけは及んされ其ま採て加ふ
- 一 他國の人名ある人ハ考知ぬく羅らん金玉の句を人ハ水
 て加へもはあれを傳へ誤るるもはうりくは是採を
 けりあふはるはくはるるあふ申すは
- 一 名家の人あるはつる玉人あるは所名ある事とつりてはれを
 ちんちん又ハ二章三章なる人ハ初部にてはるるん
- 一 都て句座ハ其賜るるの遅速ははるる書つてはるれは
 晩春の景物出たりてはるるの季題はあふもあふり
- 一 東都ハ布論あり隣里の人ハ多く浅きもは
 有人ハ其を採りて事のおそく信て也是を認る
 ハ疎むり似れも標をたれを録しりて聞ぬ



縣雨還山

一の怪西洲色

多興未歌

月公切住

李何和

~~~~~らん

~~~~~角む

秋の夜

月もこぼれ

~~~~~とく



交西大機教寫



~~~~~

月可梅方雨

雨字散月

深ふ意切住

冬死を完影業

白菊

~~~~~



密寒松并墨

擬蕉翁雨后望月

樹林一枝

風起月輪急行雲逐影過猶如餘雨色

樹杪滴聲多

根本澤木

煙林過雨後明月乍飛輪今步思君處

不知零露頰

大龍池洞

海風吹雨過霽色滿勾欄仰望雲間月

林標露未乾

鹿嶋集卷上

秋之部

首もうち雞人うりくまきり

武藏

南山

末くれやうをふふははの憂

深川

一雨

捨舟の月たふれうり松の音

常陸

希聲

斧の柄子雞既倒電うりうり

高山

あつのもい瓶をさるる菊の産

都本

白萩や孩はもふふ今能取

吐雲

石のあうやうさるるの夜明と

鹿山

空の暮る山の暮と流の風吹  
 文龍  
 夜をくぐれ秋もる月の跡もる  
 白水  
 葉裏より月の出てり色蕉ぶ  
 潮花  
 月やわねもる月のうけひつ  
 其光  
 秋の白雲もる色蕉ぶ  
 素迪

○  
 秋月や人し痛しのおぢりぬ  
雪登齋  
 不鷹  
 半分の空うらなう花はら  
寒く亭  
 青牙

は那やまぬおぢりの九月尽  
 完未  
 入おとほくろく秋のうけひつ  
 年心  
 何おんて守りぬ秋の月  
江戸  
 普成  
 本啄きの世用そのくねて瓢のお  
 雪珊  
 空明りて空まるとお葉ぶ  
 普山  
 秋のうねり秋もる二夜も  
 其由  
 夜寒さやま秋の葉裂裂る  
 子蘭  
 新設の思し情もる葉もる  
 木奴  
 移るよ母住もあはれ出の石  
 草石

花なくや一時雨のかし一雲

鷺雪

未くぬのけり光や月の光より

青我

是道階の拾種りり一葉の本より

投瓜

秋の花は散るつれをいふおれり

且々

稲妻の毛白お物りや雪の宿

枝直

白葉や花よりさほる小夜巻

寥松

○

名月や六をほりしむ夜の人

成美

新扉しそ夜を眺さるや暮

屋張 岳輪

左むよねもほいそは秋の音

木子臺

葉より低まほるは心

江戸 浙江

川秋や赤顔る鴨の音

太郎

山もくや音よりほる夕煙

文鳥

晴の星はほるや音の宿

美都良

心下る秋の軽さよと朝の秋

眞房

秋の風はほるは心ほる

人充

片もくは口初るは音ほる

魚石

是こそや踏踏ふるは音の音

君山

月や秋身のを受強よ是の形  
山陰のそををわくそ一葉の素花  
晴るつや足事くく川原草  
川節や花咲る灯のえはる  
山屋おらるも然らる枯のり  
月影山を照らし霞の南  
花咲るはく梅一花下る  
是の敷のちる宿よと後とく

○

素龍

藤雨

瑤未

吳藍

鼠肝

柑翠

巢北

まろ下より桔梗赤萱女郎花  
一葉の落し梅の廣花よとそ  
新をそやあらし夕や曲突の虫  
風くそ花を片そよ来ぬさ  
夕くれやものくくあく景畑  
花をよの庭はらるる十三夜  
秋の月有とあま相外  
河くそくほあらし一秋の心  
風くそ中くらしぬ花葉か

翠兄

能阿

月兔

起風

巴山

蜂子

帶雨

くくく水や稲吟をあるき四五ね  
焔の雲を金とめて日のゆくゆく  
立枯や壁の穴も夜の明る  
稲妻あやふのふとくは百の矢  
う月らうそも 壘とてく稲葉哉  
けんとおとすくくや 園 止  
少くく蚊やうくくおとく月よ鳴  
虫のさなきふあうく夜ぬ葉  
杜のうおとく人うくく

五十藤  
吐嵐  
公木  
白騎  
左月  
宗雪  
勇奥  
仙子  
森

初雁をくくくくくくくくく

可部里

梅干を葉よりふや雪の宿  
藤ぬ家のひくくくは 砧くか  
悪くあうくくくや 杜のうぬいそ記  
去くれを樹くくく 杜の目くく  
衣うくく月もあうく女うか  
夕うけや小松山くく 虫の鳴  
今 龍く稲妻さいる 夕く

こち彦  
百舟  
正母  
柑翠  
後素  
一賀  
龍和

月星の梳とのつ然おそそ

其明

そあまや白ゆきふる麻ひつ

東嶽

一枝もろ袖ぬあゝ秋の気

角水

小草うらうらふすれ丘の家

上総

一之

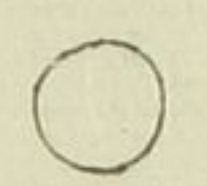
ふら白おあううつらてあま

村翠

霞もろは家のやうねや秋ね

南都

平角



申くく月とまはよるよ雪の月

買月

朝の暮れうらとまつて色るあま

常陸

壺仙

雪のぬらうん電とうぬる芒ぶ

利根古

明月やあけても田るあま

江月

花すれ夕せそる禁の南

疎懶

社の日とあおらう色を障きう

阿量

費は秋の屋敷うら秋の空

知水

花すれまの夕りももつ終り

五葉

爪とれは遠くもぬらう秋の風

中書

あまの葉のらうや柳の秋原よ

角丸

野かゝや子屋ふあゝ秋の末

孤舟

杖をよや丹戸をうらぬ水はる

如扇

いく曲を尾まき月を形張の川

柳葉

杖の股ふくや日のてゝ涼魚

梅枝

おろしきの月を時破の形

直川

追ふれきいけはくくをを系

左文

菊のまき菊えとそく居るく

可笑

久くや中飛あうく縁の上

石噴

川杖と柳一古く縁の松

真向

膝せく風のをれを礎のふ

玉屑

白菊の揺出さく電を咲あう

真向

杖のせぬあうを縁もえたる也

明象

白の荒巻く朽もる改めのか

其堂

てくくくくくくくくくくく

苔壽

○

稲子よ清くや神の松

素中

二之本難張く寸度

相翠

まくくあうの脊を鳴く

其堂

いつくく能縁区の梅や梅紅葉

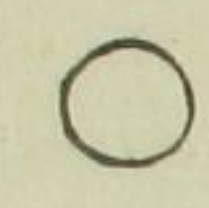
相翠



嘆くえそ暮井林を涼ぬく  
 世見惜ふれさる久秋の年々か  
 秋く林や夕のそ夜あるに新し貝  
 胡麻土灰は赤志くぬく秋の情  
 小見連海味そふ物うら子のそ  
 志く果やあり秋終ふる昔あはれ  
 家木下汀のそくや原のそ  
 新くなくかりふそあうそ新の林  
 是程の野をわくものそ暮る形

不替 南斗 風笠 尺素 秀賀 朝鳥 東車 鼠文 秋丸

梢もる暮き川や右の月 川柳  
 母の是あきとま程に洗く 大蓑  
 いんもあも半く白くそあ月の 蘭桂  
 秋色のそくもふそ秋の冷 既醉  
 候人の夕とあり昔昔の極 湖中  
 花すれ月をそとく出て水望る 上毛 鷺白  
 雪くやふゆくく秋の立 一醒  
 月のあるそをそ出す秋の冷 斗入



新白やと新き八月十五日

乙二

去々家や火を切こる馬の上

恒磨

む〜白と降し志なき〜妹の子

奥引

冥也

家よぬる草や雀のうね袴

夜白

節子も月の名もや宵の宿

之綱

白の積草よ〜はく命ふて

搦堂

け〜持て門〜つ〜や三日の月

其月

飛かくや心登り〜るあれ畑

其月

井のつ〜る白子考あり杖の虫

蘭車

活る火を猫能見と君の夜まよ

上総

鼠白

独活の庚戌赤もぬぬおきい

求魚

やあ〜ふ〜せ〜清〜の色よ金ふり

里風

ね〜お〜あ〜り〜て人〜秋の景

兩律

字列の聲子白〜り片の家

和風

稲葉や人目の深り〜る解り

潮花

老〜〜〜〜〜わ〜れ〜ち〜思〜ふ〜お〜ど

満枝

未枯や火強竹〜く〜岸家

李洞

あ〜〜〜〜〜不〜も〜〜〜つ〜夕〜和〜葉

塘

お顔やさくら咲くも風う吹  
名の清くぬもよはな女も花  
一糸  
雨塘

○

夕とも時々無き野男よ  
特植うさ心櫃うや社の心  
葉を咲きさるの庵り那  
分申しや日の集らぬ芒つら  
あさうほのやあを結る分限ふ  
しつら田うんを月田あふ  
月居  
翠松  
巢也  
蚊牛  
素桃  
榮芽

秋草の秋も江戸ハ角力取  
やうき一の秋とあさう芦の花  
指宿も草の清く杜々花の春  
は荒らうそ千鳥ハあは秋の空  
秋の夜はおきし海きさり一葉  
真之雄  
双湖  
一蕙  
守静  
春蟻

○

や海原よ野駒う月のつら  
晴や木のうら花月を晴る雀  
色はよ枯れらら一夕うか  
近江  
伊勢  
上総  
賑別  
青川  
瓜洲

十

一箇の黄葉ははるかきりきり  
 石臺の中や粧削のかきりきり  
 遠近相伝風きり  
 新のく二百十日の昼寐きり  
 本侍へのきりきり葉の黄きり  
 焼米きり一坪目きり田中。形  
 世無き月の光きり手物の定きり  
 ちつ月や崎の柳もあきり  
 朝つ〜〜の登きりきり葉

馬明  
 蕨蘭  
 野風  
 金洞  
 賀厚  
 組阿  
 涪陵

み〜〜るはるの身きり杖の膝  
 と霞きり十廿夜あきりきり  
 世無き美を掃きりきり糸瓜きり  
 葉無ききり葉の黄きりきり  
 秋のらねあの人あきりきり  
 人よあきの光きりきりや秋の懐  
 女高きりきりきりきりや秋の懐  
 月の光きりきりきりきり  
 ちつ山きりきりきりきり

露萩  
 三卷  
 除来  
 游車  
 古彦  
 花童  
 完星  
 くら女

清々入る中子さうは家か  
あふきの晴よるやまうさ  
ほくく歸をり人や杖の雲  
晴蛉の影く片やあ駒  
近こらやそち屋気まうたれ  
去る星の海越らん思つた  
荒ふくや月も思つてうけさ  
をけあまははれは秋の蝶  
をうね一もまほて立るり

土

夏楓  
萬志  
北身  
汶水  
楓江  
紫石  
里曉  
耕壽

中子さうは家か  
あふきの晴よるやまうさ  
ほくく歸をり人や杖の雲  
晴蛉の影く片やあ駒  
近こらやそち屋気まうたれ  
去る星の海越らん思つた  
荒ふくや月も思つてうけさ  
をけあまははれは秋の蝶  
をうね一もまほて立るり

東陵  
扇風  
花扇  
村翠  
上張  
輪之  
肥後  
綺石  
一白  
并入

三

うて〜 祐も二十はあつた

月取

川林やねんよるは秋の人

常陸 得雨

糸瓜煮うる海の人も笛ふる

陸奥 秋夫

隠し子よ新白咲く時

白羽

初秋やあつた星の出るそ

東庵

廣電子浴して居る月夜

駿河 吾友

秋の蚊や川流もあつた

伊豆 霞江

花着るはくしてあつた捨扇

讃岐 朱雁

枯葉の音くさくさ林のそ

能登 破巾

くた〜子のあつた秋の暮

能登 破巾

秋の蠟〜子白のあつた

能登 梓翠

月のあつた山をうらうら葉ふ

能登 石臈

まつるやふ〜るあつた

能登 石蘭

む〜るあつた花

能登 士朗

躍るあつた病あつた

能登 知月

う灯籠十百億とあつた

能登 補賀

片吹く花はく〜るあつた

能登 鵬翅

空曠の世を指葉の光るよ、  
玉鳥

身の秋残れりともまゝんをぬき  
天羊

山あふりやあはれ秋の夕つか、  
眠鯉

岩よりほ小あはれつや秋の月、  
蕨石

飛てこそ星ある由年終りのる  
芦人

いふはあや猪追ふりほよま  
潮月

秋のうれ人々のして馬ふり  
故枝

ほくくく木のゆき居るやあ葉  
兔游

秋のまゝうけりけの風白  
黛青

秋のまゝ魚一とゆまの風うか  
黒水

神谷の小雀を連れて通りゆく  
五璉

秋の暮脊戸うき色更をりゆく  
几杖

いふはあや猪追ふり見て居る川一星  
乙二

まゝ瀧やあはれをみえて秋の月

秋の秋のやあはれをみえて秋の月

冬之部

鶴ひつつかたも唐のあゝか

太常

新おや端えはるす畑の古

山松

雪合やまをさうもすゆ魚く

秀所

みくくしけりれまきく雪の義

田岐羊

まつ氷風くくふるあふくか

松琴

まつ雪や柏杞の実赤よを根の上

鷺雪

吹来ても瀬くく鳴く高千巻く

右圖

廊み前くく後ぬくあゆ雪

其光

わ家もすかえり記をま

魚房

枇杷のえんろくく落る屋根の苔

人充

福村のくつ積り垣や枇杷の花

素龍

いゝあゝの世をまつくく新の雪

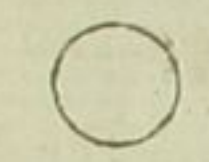
蓼研

世もすく見えま時るまをむ

柑翠

くくねまあれくくやつくくねま

沙羅



橘のまもあれはある志く電さ

可勢里

まつ時る川砂あれ止くまは程

寒松



こゝや日の子ら通る海の底  
江の芦の葉裏をんころそ  
鶺鴒の尾ふもかりひるそ  
白雉の里より古火おほけさ  
茶の花はつらつらぬ白さ  
あゝ春の物よさつらぬあ  
あゝ秋の物よさつらぬあ  
砂ふる鶺鴒もあつらぬ花  
あゝや塘の横の赤遠く

梅翠  
祇火  
其明  
巴水  
唵水  
一賀  
完夫  
後素  
魚石

冬川やうちもてある松丸太  
束ねくの連よせつ岸水  
日く向て移おくこ枯野原  
白雪や月ころこの山へ入  
酒殿の赤人つねに雪見さ  
暮るる雪凍まひる冬田原  
女おも巨燧へ入る詩也  
はま雪や舟燭を先くる梅の影  
あゝや貝うけるそよ中島の梅

岷水  
踏哉  
東壽  
不哲  
卧牛  
蓼奴  
芦潮  
左月  
秀賀

十五

白雪やるくびれて人の川  
 鼠文  
 炭竈やまのふい雪の枝あもも  
 可笑  
 高きよふおりのあうのあつたり  
 祇中  
 野一河孫よ夜業の孫まをり  
 葎傘  
 あ〜〜やめま〜つねよ崎の人  
 沾國  
 野の晴うつりまは小雪り形  
 故六  
 や〜や〜下〜さ〜ふ〜や夕千尋  
 葛三

志う〜人通〜松の月  
 湖中

枯草ややひあ〜冬の吹  
 翠兒  
 冬の日一日晴〜止〜より  
 越右 竹里  
 茅も木も瘦〜公孫の志〜ねる  
 梅枝  
 埃あ〜唐もの店結〜りり  
 葎雨  
 あ〜雪の庭も志〜ふ〜雲〜ら  
 上忌 祇孝  
 ねの影見つ〜ま〜〜冬〜の雁  
 南榮  
 川や誰〜あ〜峰夜の竹火繩  
 撫月  
 うれ草戸のうけあ〜の毛〜の巻〜ら  
 歡白  
 冬の日お〜り〜る小坂さ、

有鳥やうもはつる色  
 水もたふ多ね月をささく  
 とそまやみそ路いろの竹筵  
 松のたぐや古院の 片 處  
 餌片ト籠女果申く枯雪いろ  
 灯も入らそはうあし冬の唄  
 木枯を先りあ宿能翁うふ  
 木々しや日曇を止んと出  
 人のまをそとる小妻うふ

白鷗  
 正母  
 菅教  
 野牛  
 寥々  
 枝直  
 梅翠  
 并六



鴨あくや上野の鐘能古うよとそ  
 まし路よ松の上雪を 冬籠  
 風々々々木のと衣や音田川  
 松や花々々あふく旭て花  
 松葉を走々々々々々月々々  
 賤うおハもしる屏風や冬構  
 可くそそそそ待るうう  
 橋心や吹らうううううう

護物  
 成美  
 緑波  
 爛々  
 一輪  
 鯨波  
 疎懶  
 土木

二三 鞠衣走の梅の咲白く 義勇

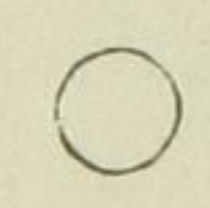
白雪やさき世ふ果ぬ朝あり 豊水

里馬の薫く世の白く夕時る 霞夕

僕く火囃はく事る小まうか 載路

姨捨のうね草部の日白く 彦張 姿阿

旭よを囀くくれちち教 古人 舊國



冬籠くして中も 花さくく 青牛

世能中を煙くく言や梅の気 士朗

分入を霍の好そ木くの雪 翠雪

あうねや不尽毎日くくある 上巻 雅達

掃除く 枯のいうはよ神まら月 沿凌

夕くくれくく時るそ言ふくく 梅隙

白くくも 儂くく居るり 携うさ、 不逸

そくそおの携の上さぬもあ、 去力

斥里や軒ふ時白くくくは今も、 葦山

世寺の難ふ果よけは屋 葉掃、 才谷

葉くくもくくくく 平おのり子、 三史

清吟や入口より也霧う海へ、梅曉

こころを伝ふるの破走や大なり、素泉

石菖の葉は解のすくや初体る、仙子

明と越す節くえそ雪みらし、輪之

くみ草のりも南へ折より、願人

賣る者風の中こらる黄葉、作笠



岡行くもとの雲う一層く松、不審

ふりあはるる年定るをうか、常陸ト甲

物思ひもくく増すも夕時る

おすくや月につけそ雪をんる、柳枝

桑よとる人そ人ある深夜の梅

門くの長を住居の蔭るる春、素谷

志く荒くおそおもふく入日る、直川

あふるや月くろくつ春遠岬、知水

あよこくく踏もそ月夜さ、得雨

はくらくく心話るるおの雪、千万里

浪を焼漁火清くあく千る

海うねりうききこむ岩のふ、午川  
連なり夕けきよき冬田、梅翠  
人きこむ力冬中の描けききき、古人五明

大なるまきて羽織をうねる雪のふ、亘姿

平おろすや黄、此もくちる山の隙、江中、莖志

草庵や帝子まねく四目ふる、梅壽

桶のうも糸つうや千ききき、素桃

去りくも、能や都に夜の雪、波静

冬川や花をもつ本枝、新法味、とこ女

古のうて星をえききき、拍、常陸、若壽

きき葉く左きききき、草もふ、専守

情くく不足らん、る者の小きき、静丸

平おの原小葉のも能く、来みき、吐山

はとうり夕きき、れ法の、霞葉、霞江

久き、俺もあきき、れのき、もき、拍舟

布由の月く、離、まき、る、相、武、真向

櫻、花、や、井、の、れ、き、き、き、の、様、宗二

山井くさ雪吹く湖の岸、な  
 冬の夜や馬の事をを裏構  
 山寺や煙あめり冬の月  
 日のわつら暮る所果の倉屋と  
 細代木く月く懐もちおうか  
 埴埴のほけ返りぬ世と  
 山寺のほけ返りぬ世と  
 山寺や氷の上をく能記  
 ありきの嘴つき合は日くれさ

江戸  
亞沖

溜橋

阿量

車潮

羽朝

吳藍

子鴻

魁坊

梅翠

懸くよ印来ぬまゝる寒くか  
 獲覚

夕々本ま日の多菊能眠くく  
 満月の小片く刃たるおねと  
 伐倒さあすあ踏りぬやと  
 十月の虫を修中あ海く  
 志くるや横子押りぬの  
 芦の宿まれ葉まらぬお家  
 道帆く志くけもんえんての

江戸  
縣磨

出羽  
杜齋

寥松

祖風

巴火

芳明

雅進

景いりてそお難く柳

里曉

うらぬくもゆく海りや水の聲

露水

仮初の志くれあうく小石の時

鬼窟

枯かき草の根残る夢馬よ

梅枝

月の光り日あけはうれ柳

完扇

吹くくくぬやのくくや昼の月

可風

去るくすりの波やすくと見え白鳥

梅蔭

夕暮る荒らつづつ海白くそきり

人去るく船多の糸るや畑ぬ

木の根多くく田々 枯野原

一雨

舟まりの丸をくくくれき

可里原

山吹子前立浜る年のうらけり

完未

古き感やをあるハれくま

寥松



春之部

十五日晴れはほろほろ梅の花 音牛

花より死なぬ子よ啼きよて 麿松

雲を引くつばき花の山 梅翠

黄きやゆきゆきゆき家へ花 雷如

はる風やきよきよきよ田川 文鳥

あけぬえん家あり枕の花 魚房

地燐の来えて美し草草 汶上

川原のあけぬやうきふり 祇文

晴れ素足はききやはる花音 吐雲

口よりぬきぬき梅の花 巴水

ふく日は花つゝ白よ梅の花 豊和

思ひを〜〜や梅の花 常水

つる羊を斗きぬき 白水

淡く梅の花きききき風笠

あけぬき人のええりきき 尺素

白の夕やきききき 完甫

あけぬき〜〜梅の花 岷江

春之部

まき自の海めりもかくる也  
此の電も夕涼草より春の海  
標、色や自中おま結瞳、さ  
るふくくりやや梅の下流ま  
百姓の面西——を難炭表  
少くく見くくも出くく海の標  
新起のちく見色くや春の表  
光て子くほふ光の留居、か  
ふ吹のほく輝色く陰りく

東壽 南斗 土木 大守 仙李 萬古 卒居 松雲 東陵

新のるやや少く陰も春の自  
梅の春あくく老ふく吹色く  
平とぬや霧の集る山の居く  
山寺もあけく梅く報る月  
片く花や月の見え指く  
菊日の暁く色花片く子  
春の月や女中く能島仕る  
夕片く庭あつけて疾く

耕壽 竹風 磯丸 孤舟 東湖 鼠肝 了輔 雪萬



獨のこふをきくもきくもの形 江戸 普成  
 世に性撰集の世よせれんを、 普山  
 朝片々く見ぬ世のや海もかゝれんを 其由  
 未のふらうと首咲花をほそまらば 雪珊  
 天在星の橋もあらん様り草 子蘭  
 佐和の片しをまきのり清く歌 秀所  
 甚多やあめのかげの山松 山松  
 空さやいつそいと梅の玉帯 松琴  
 舞雲雀 敬亭 山のびらうらぶ 雑声

梅さや鶯のうねのつらうを 申岐羊  
 山果をさる雀も見え申れ様 月 時丸  
 花より鐘つらぬ伸をは中へり 萱雅  
 山亭よりおとこをさる木のかげり 昔我  
 亡人を羊しくさるるはくさる 老拙  
 親船の宿電足りよる汐干哉 卧牛  
 山里や梅はあかぬおのる 梅翠  
 鼻くあて梅嗅人な梅さる 牙心

○

内をさす梅の旭や根本古  
春風の波も吹き舟を川  
舟の恵か夕成の舟杖さる  
舟の恵か夕成の舟杖さる  
舟の恵か夕成の舟杖さる  
舟の恵か夕成の舟杖さる  
舟の恵か夕成の舟杖さる  
舟の恵か夕成の舟杖さる  
舟の恵か夕成の舟杖さる  
舟の恵か夕成の舟杖さる

恒丸  
大節  
百舟  
翠兒  
南山  
羽仙  
之綱  
美都良  
一之

黄鳥や霞の暁  
海星や花より  
○

輪之  
翠雪

左際より春風や  
梅のやほ梅のハ  
梅のやほ梅のハ  
梅のやほ梅のハ  
梅のやほ梅のハ  
梅のやほ梅のハ  
梅のやほ梅のハ  
梅のやほ梅のハ  
梅のやほ梅のハ  
梅のやほ梅のハ

一茶  
胡蝶  
寥如  
梅翠  
長齋  
李塵

不尺子の山梅のまじりてあふなり

真之雄

春の月影に申すもはなれぬ

一蕙

はみくもかきくもはなれぬ

森々

夕暮のやみかきくもはなれぬ

研石

とくぬのこもあふん猫の恋

秋虎

世のまの光をこあふん和心

既醉

月影にまじりてあふん今

眠石

物うらみ抱き出くも

仙風

鳥のつや除田りあふん足り

合

雪の雪月うらみ

文母

鶴人うらみ梅山梅

鐵船

梅影うらみ知りるり

志圭

子孫先よきも

雨塘



人の柳浦山あふなり

長翠

鳥配をくもあふん梅の光

冥々

梅影にまじりてあふん今

梅翠

塊をくもあふん梅の光

都木

文

夕富士の清波をうけ 柳を  
 白の峰をうけ 雪の雪  
 らぬるをうけ 雪の雪  
 よろ柳をうけ 梅の梅  
 をうけ やあ 遊れぬ夕景を  
 元来ぬ 花一山のあ  
 峰の飛はぬ 情をうけ  
 草野やあ 念合をうけ  
 清めるは やむ 春ハ人のま  
 帰調

日のくれを 松の松 緑の緑 海  
 来その如 餅よを 蓮の蓮 摺  
 ひささ 花ん中よ 花の花 和  
 粗皮や 覚あふも 春の春  
 吐く出おし 花の花 月  
 山家 麓の雪をうけ 春の春  
 く 花の花 東山  
 白の峰の中よ 柳の柳  
 白の峰の余寒をうけ 春の春

此若 緑波 爛々 一輪 鶺鴒 河洲 兔七 波静 帰調  
 双湖 栄芽 竜和 薬圃 雨院 村翠 碩布 春岐 春曦

葉花ははらへ見よ帰る也 湖中  
遠山をりし一能宿く春のる 素磔



竹丸く白ひるらん野路の梅 溜橋  
ワ草や家尻子と井戸の苔 石瀬  
人独りて〜その強うか、 吐山  
弁ひくく長閑な所〜 太水  
十里来て防風印しる白の霧、 祇篋  
ま〜の中遠方の鐘能山是、 鳳仙

啞の子能眠るらんや春の空、 采川  
種〜小島うねり孫と親、 其草  
雞啼て裏家の柳まねり、 仙雅  
白うめや雪の光能友うつに 尊字  
曠るて吹毛よ出〜春能空 露後  
月見一と降出さはる能小るさ 月兔  
古くはやいそある宵の風う吹 蜂子  
おの花や白鳥有る能と〜川 吐氣  
梅の息り葉枕の枝原さ かつり

車もろや中し花もつ小舟よ  
 ちり内々夜も物のもやひまれ  
 雉子かややすと風の家を吹  
 号うし床息見さる戸口芽 常陸  
 鬼益む心者誰も持うりり、  
 けし風や馬ゆらつる小松原、  
 川車や埃のうきや 造り花  
 垣根ふる勢う二月の旭うふ 日向  
 花垣の底ういし終ん花七日  
 公木  
 白騎  
 鬼産  
 左月  
 薄雨  
 起鳳  
 其堂  
 月化  
 星布

花を見る心を親もきくえぬそ  
 花の日や履きあふ履造る  
 山榎ほう一人車も那し  
 夕曇りやけぬる舟の釣小舟 上総  
 勢ふるおふきあり 椿  
 七種やあつたわらう車か  
 夕月のうつる山田やふく性 女  
 乙ううてぬきの軒へ見えぬん、  
 みる彦  
 亀山  
 葛三  
 三壽  
 白丹  
 浩凌  
 やりし  
 素遊



老ぬるも少子や志まじりて春の風  
 日の本はとも花の春家かた  
 いそくく教るくく淫靡ぶ  
 朝ふく時久く其の盛さ  
 所詮なく折を控りや路の梅  
 雪をくむ日を白梅の生るの形  
 糸のらや五匹のきのせりく  
 昔も日私を能ある時りか  
 白の梅夕々よくそんく  
 鳥鼠

乙多子や大口のくく春の昼中  
 夕東風や何うか魚の味さ  
 あり柳の月の夜比もるや  
 山果を玉やきよくく不鬚也賣  
 巖五把翹子語くく梅家さ  
 新風や吹きて梅咲く  
 かつ花をりれ見ると思ふ也  
 柳、けまの聲響はく  
 標堂

○

天鳥

三史

葉子の庵子なつてくわりの  
 草の戸や岸りえ出で人出入  
 昔たるとも後一節一巻の夢  
 夢の梅咲よもつねハ浦山  
 候も思はる也もさうし  
 胡麻をまく日はあつた寺男  
 田中一鳴りあ白あま似ても  
 ぶりけや花もつねに湖  
 雪降る白尾の居る春日

治凌 浦尺 夢奴 東車 朝鳥 茂挂 勇貞 白鴉 壺仙

才やくと昼孫を海一猫の屯  
 権後寸花根のくほの横うか  
 葉子のうけ花子のうもれ見ゆ  
 夕や雀かくや日をもつ松の上  
 朝月を柳もろ知て翫り  
 植ておけ咲くら菊の名ハ野人  
 花の夕下戸も馬もて居る  
 朝りもあつてを居るもさう哉  
 ぼくのあつてを居るもさう哉

于川 菊哉 常陸 琴路 和扇 湖東 知水 左夫

木のふれおつてらるぬ桂さ  
 中書  
 其の中や松葉はくく一城の塔  
 一川  
 くれ先くふきくくむはる中さ  
 上巻  
 蕉西  
 窓一さや柱中りよれ庭の中、  
 龜毛  
 里飛一て黄きりあうす日うか、  
 雞口  
 風や舟はのあろ沼の碓  
 蘆花  
 はんぬちて居る田螺の倉庫さ、  
 柑翠  
 独居てもとこやとちのむうか  
 宛来  
 自よ巻て花さうらよ来すうん

はるみ見申電柱曆の張曲里  
 夏松  
 梅雪の毛うり魚ある日並うか  
 枝直  
 葉の戸や雪とわれはく向は  
 甲斐  
 平橋  
 梅吹さうかつ起おりや惟然坊  
 東驪  
 舟はくちか人さうすん草の山  
 馬明  
 簾まのを雀の巣の横一のあ  
 蘭車  
 豹の眼う角のさくくの中柳  
 月泉  
 春の鳥さうん見二月のあ風点

春のふ編唐椒なる来ぬ  
去を望む華をよき梅うさ  
見ぬあそびさあはらうはるの正  
馬の子能取もつ開ぬよ家梅  
はともよま江終の折うさ  
柳あうくるさつう雲の鈴韻  
紙のあつう雲くも開うさ  
春の日は日帰る旅のあそび  
雛子あうや丘元ふは能あう

樗村  
眠鯉  
和風  
竹風  
野牛  
故校  
兔游  
五連  
鳴丸

戸履は移の川方よはのう梅  
中庭う船流しをり舟の雲  
志つうさるおは花ちの薨うさ  
石りう梅いつうさ夢と吹ぬん  
世あそびもよんさあぬ柳うさ  
ハ重梅あうさうおはさうさう  
元日もさる申う草の鹿うさ  
起くくく花えさ里の菜汁うさ  
羽あうくとやひくくさあうさ

潮月  
紙中  
くさ女  
芝童  
方壺  
几杖  
成美  
士朗  
梅翠

夏之部

花子花つみやふてふの舟舟さ

吳山

みくくおのりー推のこられ花

成美

昼のよ 鷗曇まさくよ白もふー

三花

かつ木をぬーつるをふおり

莛志

夕白や 柳をふーかや 斬り 園

梅壽

おま秋ー 糸巻て次子を通く

江戸 右雄

いそくの菊のうまて 苔の花

昼息や せらつー川ち一里塚

三束町

砂瀆の 新霜降ー ねの 色

梅丸

片里や 庵てめーうまの 月

梅翠

紫玉を 旭去つー乃紀古 院さ

蕪蘭

おくるのハすー 記ものよと逢 中

越后 喜羊

咲牡丹鳥の口ー 余るふか

浙江

くーおの花を 咲くー 牡丹

蒼虬

夏あけー 柳くー うるまの 物 音牛

かきんはー 山家ー 芝尔 咲きー

寥松

かつしらのうきを採る是より 大坂 八千坊

川より肩帽子を脱ぎて後より 加賀 既白

輝飛や茶を丁ふりの朝日 對馬 関山

なまや雛子のちろよ梅を 播磨 布船

あまや賢者の梅垣もあし 草石

あま師も詠てを 鶏声

湖より住 木奴

あつね美人もあしぬ 時丸

六よりあつて 蒲丈

夕をやうは 甲斐 嵐外

あつね魚 乙 ち



子供 信州 蕉雨

あつね 輪之

あつね 湖中

あつね 素巾

あつね 起鳳

あつね 乙調

大坂

ウツ

あゝ〜れを〜余〜る〜

尾張

羅城

花鬘粟と〜

竹首

此角あ〜すきや〜

、

あ〜余る〜ちを〜

出羽

民曉

あ〜けそつ〜

陸奥

投雪

川す〜人〜

一茶

〜れ家や〜

一白

四月は〜山棠様の一〜

以足

毎の家や筆の〜

大節

昨日〜も〜

吟水

善人を〜

眠石

や〜の〜を面白〜

酉水

は〜〜〜

文龍

帳の〜

斗檝

風〜

扇風

處〜

花扇

但〜の〜

持翠

親を如母の如き一輪の古界

胡蝶

夕く暮れゆくつもろくは涼く

知水

東の月を丸きぬくよ南とある

蓮子

存の心おぬけて見えは日高也

北越

不眠

世員の如く頼りやらずは

村翠

子を孫とすかたは苦あり早苗舟

羽朝

因雨を離れて涼し

豊水

多き無きともいふは

除來

古五器の門田(五字)鼻月る

梅枝

涼川よそ

はらけぬや宜稱う鼓の時の

梅翠

不とては然つて二人居る

希毫

杜宇守世を履くもか

不知者

はるくてもやう

茂林

山神のあつくと来て夜明け

山ちやあな梅もきてあ

一醒

○



去年の秋よりいかによふ山子規

素迪

風の平福 丘止去り見ゆらば

完尔

葉柳よりいかにむらう秋風

夏風

浮草をよびてむらう秋風

野翠

夕餉よりいかにむらう古香

金洞

舟跡もよりのけり 丑ねり

祇孝

山百合もよりのけり 丑ねり

其月

故桂より二日乃月 ぬきぬ

素泉

法くくともあつ田見よる夕々

撫月

船くとのとさへり 暮の秋

一川

舟れあつや船のとり跡り 汐

去方

舟れさや涼し 舟や舟も角田川

斯瓦

白草れや川よ 舟より 舟人

完里

舟れつげも舟跡 舟よ 舟

光社

舟れつげも舟跡 舟よ 舟

雷知

○

草むらの蜂巣巣をちて暑ふ

完来

火曜よりいかにいかに 秋

常水



ねむ戸のゆく夕顔の小あうか  
 赤くくそのあきく記堂り那  
 夏のとと大和系供てぬる也  
 系まつとと麻もぬ危をあらうり  
 伏あ火串川を輕舟りうり  
 あをふくや田一り常低く飛  
 ちつととほくまきる螢のあ  
 山百合や蒼きうれと旬をまの  
 夕網涼ちるハ柳の松の葉う  
 治威  
 此君  
 古彦  
 不逸  
 花遊  
 冠川  
 道明  
 錦柳  
 山虎

花山の名をうとく夕すこ  
 人あれああぬのぬてぬる四月さ  
 ちくく身もあや中朝あや免  
 小松原子規うハ鳴るこ  
 卯の氣やあは移れハ風ん申る  
 風節の見えをたはるま田さ  
 葉ううれておるは脊戸の子抱ふ  
 五月菊を獲るあやふふ  
 けくこれのあをやまもん竹の音  
 雅山  
 露小  
 溜橋  
 弥九雄  
 文紫  
 竹里  
 翠鷹  
 やそく  
 護物

○

うんこまある外ハ色あふし

素郷

う都の能早稲冷蔵くある田さ

静丸

かすすむはあり原川のうし舟

素谷

大竹よ障りくあるうなるる

常陸

匡机

あつらや柳の下能田子あ

栗うや夕まありてああり先

鮎國

白るうをまつたの白起うか

瓜洲

下やま壬生の小猿う斬う形

露萩

夕顔や移見て居る花の中

芝豊

はまくとある田んぼの夕うか

撫月

抱籠り裸をはらぬ暑うの形

上巻

呉扇

夕魚の花子科一を記葉うか

赤うりて草うりぬる岩可有

枝直

朝の端のあふく白ふあつさ青

寥松

白は子ぬれう停るあなま

あゝ遅やふあゝる花の心  
草の心を拾ひあうけよせ風の玉

嵐雪

梅咲てあゝるまきハあゝる  
花をよむ夜ハあゝる

更登

山里や松うけはあゝる  
白雪う人うけはあゝる

琴太

掃きもやアえて淋し夕も  
あゝる

いふ者そまき人のあゝる  
あゝるを拾ひあうけよせ  
を同じよ拾ひあうけよ

火のあゝるあゝるあゝる

巴琴

はるあゝるあゝるあゝる

鷺泊

字の名はあゝるあゝる

王琴

はけりやあゝるあゝる

白文

あゝるあゝるあゝる

頭吾



吳より居るるるるるるの月、  
 山幸  
 阿人  
 門瑟  
 素綾  
 見村  
 美丸  
 招丹  
 一叟  
 白麻

常陸  
 南勢  
 洛  
 加賀  
 下総  
 江戸

川平や大暮ささ木秋の香  
 扇の香草を梅の花  
 秋瓜  
 存阿  
 鉤子

